

ずいそう

ブラジル

船戸 正 啓



1. はじめに

2019年4月にブラジルより海外駐在の任務を終えて帰国しました。3年前の1月末に、ブラジルのサンパウロ州スザノ市にあるKomatsu do Brasil（以下KDB）という、コマツの建設機械を生産している関連会社に赴任しました。海外赴任は初めての経験だったのですが、それまで3度経験していた国内転勤と同様に、家族を帯同し赴きました。海外赴任の話は当初、北米にある関連会社へという話で、家族会議を重ねて家族帯同を決めました。その後、なぜか赴任先は南にスライドし、南米のブラジルになりましたが、家族会議の決議はそのままとし、半ば強引に家族帯同としたものです。赴任期間は3年と少しという、あっという間でしたが、無事に帰って来られた今思うことは、家族とともども海外で生活するという貴重な経験を得ることができ、本当に良かったということで、思い出等を少しだけ記します。

2. ブラジルでの仕事

20 ton クラスの油圧ショベルベースのハーベスタマシン（林業伐採機械）の生産販売開始のプロジェクトでした。

ブラジルでは林業が盛んであり、大手の製紙メーカは広大な土地に、成長速度が極めて速い苗、主にはユーカリを植林し、これを伐採、原材料としてパルプの生産を繰り返しますが、その植林を伐採するための、油圧ショベルをベースとする車両の新モデルの生産開始というミッションがKDBに課せられており、赴任して早々、この仕事にあたりました。

この車両の開発は日本のコマツが進めており、最終仕様の試作車をこの製紙メーカの林業現場で稼働試験し最終評価する必要がある、その準備、手配や、営業部隊とのやり取り、試作車の輸送、搬入、日本から出張で来たコマツ技術者のユーザ稼働試験立会いのアテンドなどに奔走しました。おかげで、実際の林業現場でコマツの機械に限らず、競合他社の機械が稼働している現場を、また、巨大な設備を有する大手製紙メー

カの製紙工場を見学できました。また、林業現場の他の作業ですが、ブラジルらしく、安い人件費に物を言わせて多人数で人力による植え付け作業しているところなども見ることができました（赴任終盤は、この作業を機械化する新モデルのプロジェクトにも携わることができたのですが、その完成は後任者に引き継ぎました）。

上記のユーザ稼働試験後、その際に出た製紙メーカの追加要望をコマツの開発部隊へ連絡し、何とか量産1号機から織り込んでもらえるようコマツに依頼するのに苦労しました。そのモデルは開発中だったのですが、ブラジルを代表する大手の製紙メーカと、販売会社を通じて既に大型の受注、契約済みであり、初号機の納入時期も決定し、約束済みだったため、リードタイムがない状況での調整、依頼だったからです。

コマツの林業機械はブラジル向けだけではなく、この機種はブラジルでの使用を主対象とした車両でしたので、開発は日本のコマツでも、販売先、稼働試験が可能な場所はブラジルしかなく、生産もコマツ関連会社の中でブラジルのKDBのみというプロジェクトであったため、経験することができた苦労といえます。

今考えてみると、来たばかりで言葉も解らない駐在員初心者をフォローし、仕事を理解させて進めるようにして下さった、KDBに限らない関連会社を含めた、多数の現地スタッフ、さらに受け入れて下さったユーザ側の方々に多大な苦勞をおかけしたはずであり、これがなければ、仕事は進まなかったに違いない、今さらながら感謝しているところです。

3. ブラジル、たわいもない事

赴任前は、ブラジルといえば、サンバの国、カーニバルでは皆1年間貯めたお金を全て衣装に注ぎ込み、踊り狂う、あと、サッカー強い、や、地球の裏側、という偏ったイメージを持っていました。

まず、カーニバルですが、赴任早々この時期だったので、赴任前から前任者にチケットをとってもらい、見に行くことができました。が、皆が皆、踊りに、ま

たは見に行くわけではなく、テレビで視聴という人も多く、見ないという友人もいました。

サッカーについては、さすが熱心に応援している方が多く、日本の野球よりも盛んだと思います。私も家族と何度か観戦に行きましたが、観客はなかなか気合が入っており、相手チームの選手をすさまじく罵倒する輩もいて、横にいと危険を感じます。

地球の裏側ということについては偏見ではなく正解ですが、実際に往復すると、さすがに裏側だけあり、こんなに飛行機などが発達した時代でも、出発から到着まではかなりの時間を要することを体感し、物理的遠さを実感させられます。

ブラジルへは、飛行機で、ヨーロッパまわり、中東まわり、北米まわりと、地球の様々な方向から行くことができますが、直行便はないので必ずトランジットが必要です。フライト時間は通常 10 時間オーバーの 2 フライトで 1 回乗継ぎます。ざっくりと、フライト 12 時間 + トランジット 4 時間 + フライト 12 時間（日本国内の出発場所により国内で、+ トランジット 4 時間 + フライト 1 時間など）とうところで、ドアトゥードアで 30 時間はかかります。日本—ブラジル往復は、ブラジルで 1 泊だけして帰ってきてでも 5 日間必要です。しかも、時差は昼夜全く逆の 12 時間あります。

以前は 10 時間を超えるフライトは疲れるなど感じていましたが、3 年強のブラジル赴任中に年に 2 度ほど日本出張や一時帰国のための往復を経験すると、10 時間を超えるフライトであっても、それが 1 本で済むような行き先であれば、なんと楽なんだろうと感じられるようになりました。

これらとは逆に、赴任前にイメージがなかったこととしては、ブラジルのサンパウロには裕福な人が多いということです。娘の同級生の誕生日パーティーでも、かなり裕福な家族に招かれました。広大なリビング

ルームに外から巨大なガラスの下でつながるプールがあり、プールの中にはバーカウンターの椅子、使用人に注文すれば、ビールサーバから生ビール、ブラジルのカクテル“カイピリーニャ”など、大概の飲み物が頼めます。日本ではなかなかお会いできない階級の方々に感じられました。このようなパーティーは日本より多く行われるようで、サンパウロ市内の高級アパートにはパーティールームがある物件が多く、有料ですが入居者はしばしばパーティーに使用します。息子も何度か学校の友人のアパートに誘われ、夕方に私は彼を自動車で友人宅に送りどけ、次の朝に回収してきたものですが、パーティールームに併設のプールに飛び込んで夜を明かすなど、楽しく過ごしていました。これに負けじと我々駐在員も、たまには頑張ってパーティールームを借り、料理人や支給人を手配して食事会を開き親睦を図りました。変わり種は、息子の学校の課外イベントで‘バス’パーティーなるものがあり、参加した息子に聞くと、バスの中がまさにディスコやクラブのようになっているようです（お酒はさすがに出ないらしいですが）。街中でもそのようなバスが走っているのを見ることができますが、窓はほぼ塞がっていて、しかし、大音量のラップやダンスミュージックを漏らしながら、ゆっくり街中を流しています。なぜバスか、なぜバスは走らなければならないか、最後まで私には理解できませんでした。

このように住んでいたところが大都市のサンパウロということで、裕福な人々の生活を垣間見ることができたように思いますが、その真横（街中）には、私の小さい頃、大阪の天王寺などでよく見かけたような物乞いの姿も多く見られ、貧富の差を考えずにはいられません。最近では天王寺に行ってもあまり見られなくなっているので忘れていました。

1～2 泊の小旅行で田舎の民宿（？一応ホテル）のような施設に何度か行きましたが、現地のレストランや宿泊は信じられない程お安く、経済の差を感じさせられました。

また、海外駐在の経験のある皆さんには当然のことかもしれませんが、通貨レートは多少の上がり下がりには当然ありますが、その比率で考えるとかなりのもので、いざ自分の給与等の送金などで実感するとその浮き沈みは、“非社会的集団”的な世界のように感じられます。

長くはないブラジル駐在でしたが、資本社会、経済社会とは何ぞや、を感じさせられ、考えさせられ、実感したという側面もあり、貴重な経験だったと思います。



写真—1 息子とサッカー観戦